



「アブラボテ」

西日本を代表するタナゴの仲間。その名のごとく体は油のような褐色をしていて、雄の婚姻色が煌びやかな種類が多いタナゴの仲間としてはかなり地味に見える。そのせいかあまり観賞用としては人気が高くない。また繁殖期のオスは非常に気が荒くなり他の個体をしつこく攻撃するという水槽内での協調性のなさもイマイチ人気がない理由のようだ。タナゴの多くは河川の中流から下流域とそれに続く用水路が主な生息場所になっているが、彼らは他のタナゴよりも更に上流域にまで分布し、他種が棲まないような細流にまでいることがある。そのため数年前から毎年のように治水工事が行なわれてきた紫川では以前はたくさん見られたタナゴの仲間が激減したが、アブラボテだけは支流やほとんど工事が行なわれなかった上中流域にもいたことから工事の影響を大きく受けずに済んだ様で現在でもよく見かける。九州では長崎県のいくつかの離島にも分布しており何と水環境館ではそのうちの福江島産のものを飼育している。実は福江では紫川とは対照的に彼らの生息場所が河川改修工事の影響をもちに受けてしまい、見る影もなく激減。このままでは「絶滅」という言葉が現実味を帯びてきたことから、地元の方や淡水魚の研究者の方からの依頼で

2011年に10数匹の種親を預かり、以来毎年子孫を絶やさずに殖やしながらか系統保存に努めている。紫川産のものとは比べるとどこどことなく雰囲気が違うように見えるのだがこれは長い間、本土とは隔絶されたことで獲得した福江島固有の特徴なのかもしれない。こうした地域ごとの特徴を持った個体群はその地域の自然遺産とも呼ぶべきで地域単位で大事にしていって欲しいのだが。



さて先日、系統保存を依頼された福江の方から嬉しい便りがあり、島内の川で調査したところ2016年の時点では稚魚が数匹確認できたという。細々とではあるが何とか今も子孫をつなげていけているようだ。まだまだ予断を許さない状況ではあるがこのまま島の自然の中で生き続けていってくれることを願うばかりである。

スタッフの飼育日誌

“プロのお仕事について行った話”

サンショウウオ展の中で紹介した画像の数々、実はそれらの中には私が撮影したもの以外にも今回の企画展のために提供していただいたものがいくつかありました。なんと提供していただいたのはその道の方なら知らない人はいないと言っても過言ではない、自然写真家としても知られる京都水族館にお勤めの関慎太郎さんです!

関さんとはある希少淡水魚の保護の事で以前から色々とお世話になっていて、昨年京都に行った際初めてお会いし、その並々ならぬ「サンショウウオ愛」に圧倒されたのでした。その後メールでのやり取りを重ねていましたが、何とこの4月にサンショウウオの撮影のために九州に来られるとの連絡があり、有難いことにその撮影の旅に2日ほど私も同行させていただけることになったのです。しかしそこは私も北九州・山椒魚部部長としてただ付いて行くだけでなく、地元北九州市のサンショウウオフィールドもしっかりご案内してきましたよ。長年サンショウウオを求め全国を旅しておられる関さん。実際フィールドをご一緒するとそのタフネスぶりに脱帽させられっぱなしでした。京都の職場から自家用車を運転しながらほとんど徹夜で九州入りしそのまま山で探索。その後3日に渡り九州のあちこちの山中を探索した後、車で帰京、のはすがその道中更にサンショウウオを求め中国地方に寄り道と

いう強行スケジュール! 一方の私はというと旅の初日から車中泊しようとしたら寒さでほとんど一睡も出来ず。そのまま朝の6時から山の中でサンショウウオ探しをしていたら寝不足からの疲労がピークに達し、同行の方から



サンショウウオを撮影中の関さんの後ろ姿

「顔色悪いよ」と言われる始末。帰宅後疲れ果ててベッドの上で廃人のように横たわっていたらそこに中国地方にいる関さんからメールが。その内容は「私はまだまだ元気です。あと一週間くらい大丈夫です!」という信じられないものでした。やはりプロは違います!撮影技術は勿論ですが体力も一流なのです。あんな風に生き物を撮影しながら全国を旅する事に憧れてはいますが到底真似できないことが分かりました。それでもご一緒出来た二日間は本当に素晴らしい経験ができました。関さんの「サンショウウオ愛」に一步でも近づけるように私も部員共々精進していきます!

水環境館だより 第68号

発行 | 平成29年7月14日



企画展「～北九州・山椒魚部が行く!～九州のサンショウウオを訪ねて」を開催しました。

2017年3月25日から5月7日にかけてサンショウウオをテーマにした企画展を開催しました! サンショウウオを愛し、サンショウウオに愛された者たちが集うその名も「北九州・山椒魚部」。その発起人である水環境館スタッフとその仲間たちが九州中を駆け巡り出会って来た九州産サンショウウオについての生体展示とパネル展示を中心に山椒魚部とサンショウウオとの感動の出会いの軌跡をお届けしました。一般的に滅多に出あう事のない生き物の代表ともいえるサンショウウオの仲間たち。その生きた姿を初めて目の当たりにしたお客様も多く、たくさんの驚きと感動のお声をいただきました。



日本にはおよそ30種類のサンショウウオの仲間が確認されており、そのほとんどが日本の固有種なのです。しかも日本の国土の中の九州という小さな島国にはその1/3にあたる9種類が見られ、まさに「サンショウウオの島」と呼ぶに相応しい場所です。人里近くから山地の源流域まで、これほど多くの種類が同所的にまたはその種単独で見られるその自然の豊かさ、懐の深さを今回の企画展を通して多くの方に理解していただきました。